

## 中国の図書館&書店見てある記（2）

私が初めて中国を訪れたのは1990年、上海外国語学院（現上海外国語大学）の図書館との交流協定に基づく出張の時でした。その当時は街中で人民服を着た人も見受けられ、現在とはかなり様子が異なっていました。折りしも天安門事件の翌年の事でした。

その時の研修先である上海外国語学院の図書館で見た光景で、忘れられない物の一つに遡及入力作業があります。遡及入力というのは、資料をコンピュータで検索出来るようにするため、データを入力する事です。従来はカード目録が主流でしたが、コンピュータの急速な普及に伴い、この遡及入力が大変重要な仕事になっています。

しかし上述の1990年と言えば、インターネットはまだ黎明期だった頃です。そのような時に上海では、黙々と遡及入力をしていたのです。何故このような事をお話するかと申しますと、前号のこの欄で取り上げた二つの公共図書館はかなり大きな規模ですが、ほとんど遡及入力を終えているようで、インターネット経由で資料の検索が出来るからです。新設の図書館であれば基本的に遡及入力はありませんから、新規購入する資料のデータを作成すれば良いのですが、歴史があって更に規模が大きになると、遡及入力は大変な労力を要します。一朝一夕に終わる作業ではないので、かなり先を見越した長期計画が必要になる訳です。恐らくこの二館も、相当の年月を費やしたと容易に想像出来るのです。

さて、話は少し脱線してしまいました。「見てある記」に戻りましょう。皆さんは公共図書館というと、どんなイメージを持っておられるでしょうか。私が高校生だった頃は、大学受験を控えた生徒が夏休みに朝早くから席取りのために行列をして、後から来た一般の方が利用し辛いというニュースが報道されたものです。中国ではご存知の通り一人っ子政策のため、我が子に愛情と金銭を惜しみなく注いでいるように思えます。その反面、人口の割には大学の数はまだまだ少ないので、大学受験はかなり厳しいようです。空調が効いた快適な空間で勉強したいと願うのは当然でしょう。その光景を上海と杭州で見掛けました。上海図書館では「総合閲覧室」がありました。書架は無く、机と椅子だけが備えられていて、図書館の本をここで読んだり自習したりする場所のようでした。浙江図書館では、その名もズバリ「読者自修室」という部屋がありました。こちらはペットボトルを持ち込んで構わないようで、机の上に置いて勉強に励んでいる姿が見受けられました。大勢の人が熱心に勉強している光景は、とても印象的でした。

もう一つ面白いと思ったのは、浙江図書館の1階で書籍が売られていた事です。私が知っている範囲では、公共図書館で書籍が売られているのを見た事はなかったので、少し不思議に思いました。所変われば……でしょうか。

いよいよ秋本番となりました。読書の秋だけではなく、卒論やレポートなどでも図書館を利用する機会は増えることでしょう。皆様のご利用をスタッフ一同、心よりお待ちしております。

ふじい たつや（司書・係長・アジア関係図書館）